

② 弥生時代中期における木製農耕具の器種組成について

1. はじめに

本報告書本文中でふれたとおり、岡島遺跡からは弥生時代中期にぞくする木製農耕具（以下、農耕具と略記）が数点出土している。小論は岡島遺跡の資料とともに、東海・畿内・山陰・北部九州の4地域で弥生時代中期の比較的まとまった農耕具が出土している遺跡を選び、その遺跡の資料をもとに、各地域ごとの農耕具の基本的な器種組成を復元して地域間の比較を試みる。

2. 分析の基準と目的

小論での分析の基準とその目的は次のとおりである。

所属時期 まず、時期は畿内第Ⅲ～Ⅳ様式にはば併行する資料に限定する。それには、岡島遺跡出土遺物の所属時期がそれに併行する範囲におさまること・出土遺構のうえで第Ⅲ様式期と第Ⅳ様式期が区別できない資料が多いこと・農耕具に限っていえば第Ⅲ様式期と第Ⅳ様式期では形態や器種組成がほとんど変化しないとみられること、などが理由としてあげられる。

資料の抽出方法 小論ではそれぞれの地域において、農耕具が比較的まとまって出土している遺跡をいくつか選びだし、それぞれの遺跡の資料を基本単位として各地域の農耕具を概観する。そして、それをもとに各地域における最大公約数的な農耕具の組み合わせを復元し、地域間での比較を試みてそれぞれの地域色をあきらかにする。遺跡ごとを基本単位にすることについては、各地域ごとの共通性と同時に、器種組成・形態にそれぞれの遺跡の個性をも見いたしたいと考えるからである。なお、出土資料の一括性には特にこだわらず、時期が同じであることを基準になるべく多くの資料を掲載することとした。

また、現状で見つかっていないものは、その地域にはないものと仮定しておく。

器種の分類については、各遺跡の報告書の記述を参考にしつつ、全体の統一をはかけてその都度あらたに大まかな分類をおこなっていくこととする。

なお、掲載した遺物の実測図は各報告書からの引用であるが、体裁を統一するためにトレースし直したものもある。スケールはすべて20分の1である。

では、東海・畿内・山陰・北部九州の順に、それぞれの地域における農耕具の器種組成をあきらかにしていくこととする。

東海 3. 東海（第39図）

岡島遺跡 岡島遺跡（1～5） 本報告書の本文中にも記したとおり、広鋤（1・2）・小型鋤（3）・又鋤（4）・膝柄股鋤（5）が出土している。広鋤には両側縁の上半部を斜めにけずりこみ、着柄用の隆起を明確につくりだす例（1）と、縦長の方形で明瞭な隆起をもたない例（2）がある。1は筆者が前稿で広鋤A類としたものにあたる（樋上1989）。又鋤⁽¹⁾（4）は8本歯に復元でき、身の中央に柄孔をあけるタイプである。膝柄股鋤（5）は膝柄を装着する軸部がナスピ形にならないA類である⁽²⁾。なお、膝柄股鋤の名称は軸部に膝柄（第40図132・133）を装着して鋤としてもちいることを前提としているが、直柄をつけることにより、鋤としての機能も想定できる多機能型の農耕具である。これは、後述する膝柄鋤に

ついても同様である。

勝川遺跡（6～12） 愛知県春日井市勝川遺跡では広鋤（6～9）・小型鋤（10）・膝柄股鋤（11）・組み合わせ鋤（12）が出土している（愛知県教育サービスセンター1984・愛知県埋蔵文化財センター1988・樋上1989）。広鋤には岡島遺跡でもみられた2つのタイプ（6・7、9）とやや小形のもの（8）がある。縦長方形タイプの広鋤は岡島遺跡の例とはことなり、着柄のための隆起は柄孔をあける位置の周囲のみ高くなっている。膝柄股鋤A（11）は軸部に膝柄装着の際、ズレを防ぐように上端部と中央部を一段高くつくりだしている（木村1988a・b）。鋤は組み合わせ鋤（12）のほかに一本鋤も出土している。

朝日遺跡（12～20） 愛知県西春日井郡清洲町朝日遺跡出土の農耕具には広鋤（12～15）・膝柄鋤（16～18）・又鋤（19）・横鋤（20）がある（愛知県教委1982・愛知県埋蔵文化財センター1987）。広鋤には図示した例以外にもいくつかの形態のものがみられ、非常にバラエティーに富んでいる。膝柄鋤（16～18）は軸部がナスピ形をとらないA類である。16・17には勝川遺跡の膝柄股鋤（11）同様、軸部の中央部に段がつく。19は8本歯に復元できる又鋤である。しかし、岡島遺跡の又鋤（4）とはことなり、膝柄を装着することで又鋤に、直柄を装着することで又鋤にもなるきわめて稀なタイプである。なお、朝日遺跡からはこれとは別に方形の柄孔をもつ4本歯の又鋤も出土している。20は横長で中央に柄孔をあける形態の鋤である。しかし、通常の広鋤と違って木目が横方向にはしる、いわゆる横木取りにつくられている。これらの点を勘案すれば、横鋤とみるのが妥当であろう。朝日遺跡からはほかに狭鋤・小型鋤・組み合わせ鋤・一本鋤などが出土している。

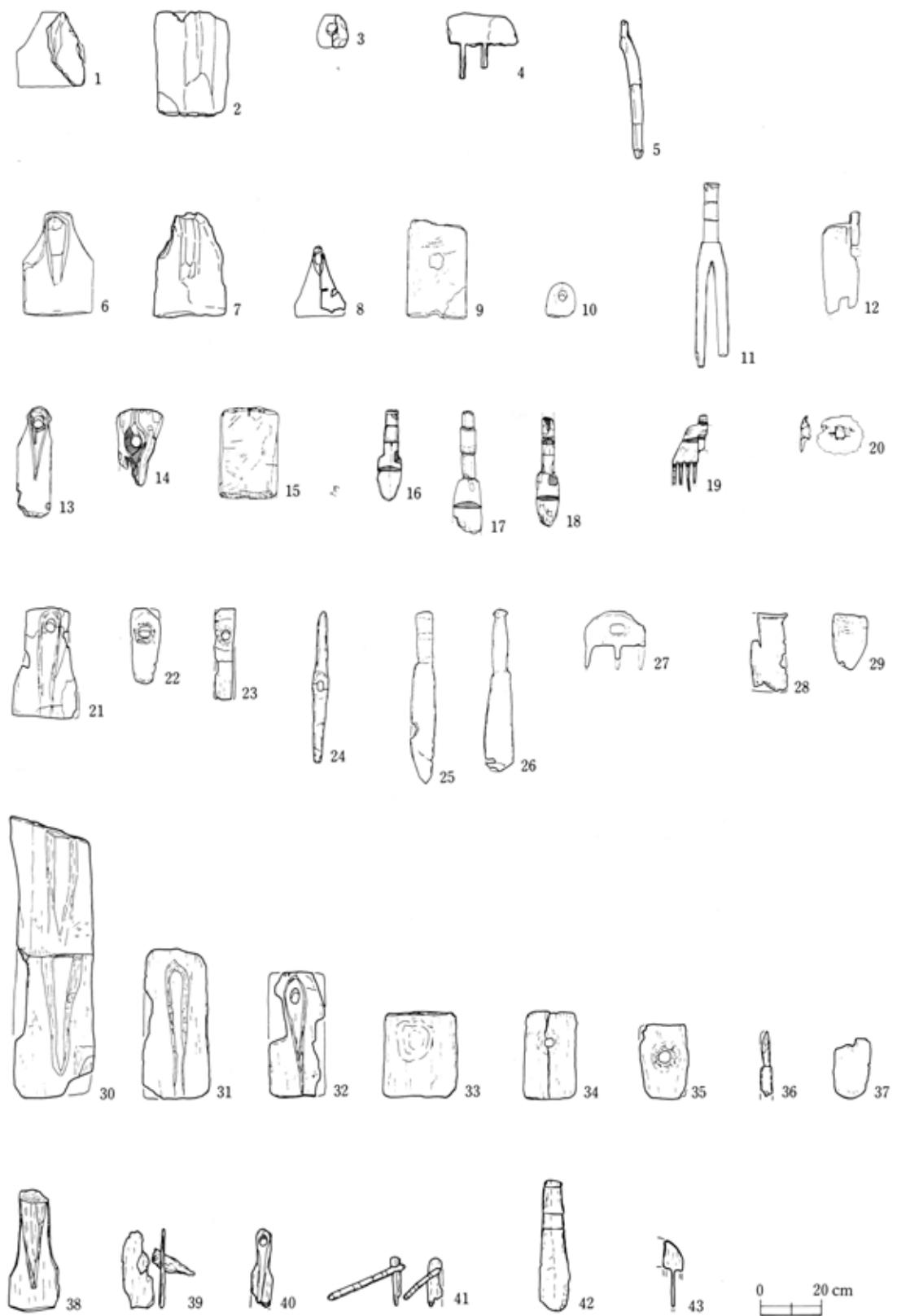
篠東遺跡（21～24） 愛知県宝飯郡小坂井町篠東遺跡出土の農耕具類には広鋤（21）・狭鋤（22・23）・鶴嘴状木器（24）・膝柄鋤A（25・26）・又鋤（27）・一本鋤（28・29）がある（小坂井町教委1960・61）。鶴嘴状木器（24）はほかにほとんど出土例はないが、狭鋤の範疇にふくめてよいものと思われる。又鋤（27）は3本歯である。

瓜郷遺跡（30～37） 愛知県豊橋市瓜郷遺跡からは次のような資料が出土している（豊橋市教委1963）。30～35は広鋤である。いずれも縦長方形で、着柄用の隆起を明確につくる例（30～32）と明瞭の隆起をもたない例（33～35）がある。36は膝柄鋤A、37は一本鋤である。

白岩遺跡（38～43） 静岡県小笠郡菊川町白岩遺跡の出土例をあげる（内藤・市原1968）。白岩遺跡38・39は広鋤・40・41は狭鋤である。そして42が膝柄鋤Aで、43は又鋤である。

その他の遺跡 これらのはかに、愛知県知立市西中神明社南遺跡から広鋤・又鋤（知立市教委1989）、有東遺跡からは広鋤・小型鋤（静岡県埋蔵文化財調査研究所1983）、そして梶子遺跡からは広鋤・狭鋤・膝柄鋤A・又鋤・膝柄股鋤A・組み合わせ鋤・一本鋤などが出士している（浜松市遺跡調査会1983）。

東海の農耕具の器種組成 まずは広鋤である。広鋤にはいくつかの形態が認められるが、1・6・7と2・9・15・30・35の2タイプがこの地域では広く普遍性をもっているといえよう。ついで、狭鋤にも同様に数種類の形態差はあるが、まだ資料の数が少ないため、



第39図 東海地方の木製農耕具
(1～5 岡島遺跡、6～12 勝川遺跡、13～20 朝日遺跡、21～29 篠束遺跡、30～37 瓜郷遺跡、38～43 白岩遺跡)

分類しうるには至らない。小型鍬は岡島・勝川・朝日・有東の4遺跡で出土例が確認されていることから、かなりの普遍性をもった器種とすることができます。膝柄鍬A・又鍬・膝柄股鍬Aも一般的な器種である。膝柄鍬Aと膝柄股鍬Aには軸部に膝柄装着用の段をもうける例が多い。なお、膝柄股鍬Aはすべて二股である。又鍬には3本歯から8本歯まで歯の本数にかなりのバラツキを認めることができる。また、柄孔（方形が多い）をあける例と軸部を有する例の2つのタイプがある。横鍬は朝日遺跡の1例しか確認できないが存在したことは確実である。鍬には組み合わせ式と一本式の両方が認められる。

4. 畿内（第40・41図）

畿内
亀井遺跡

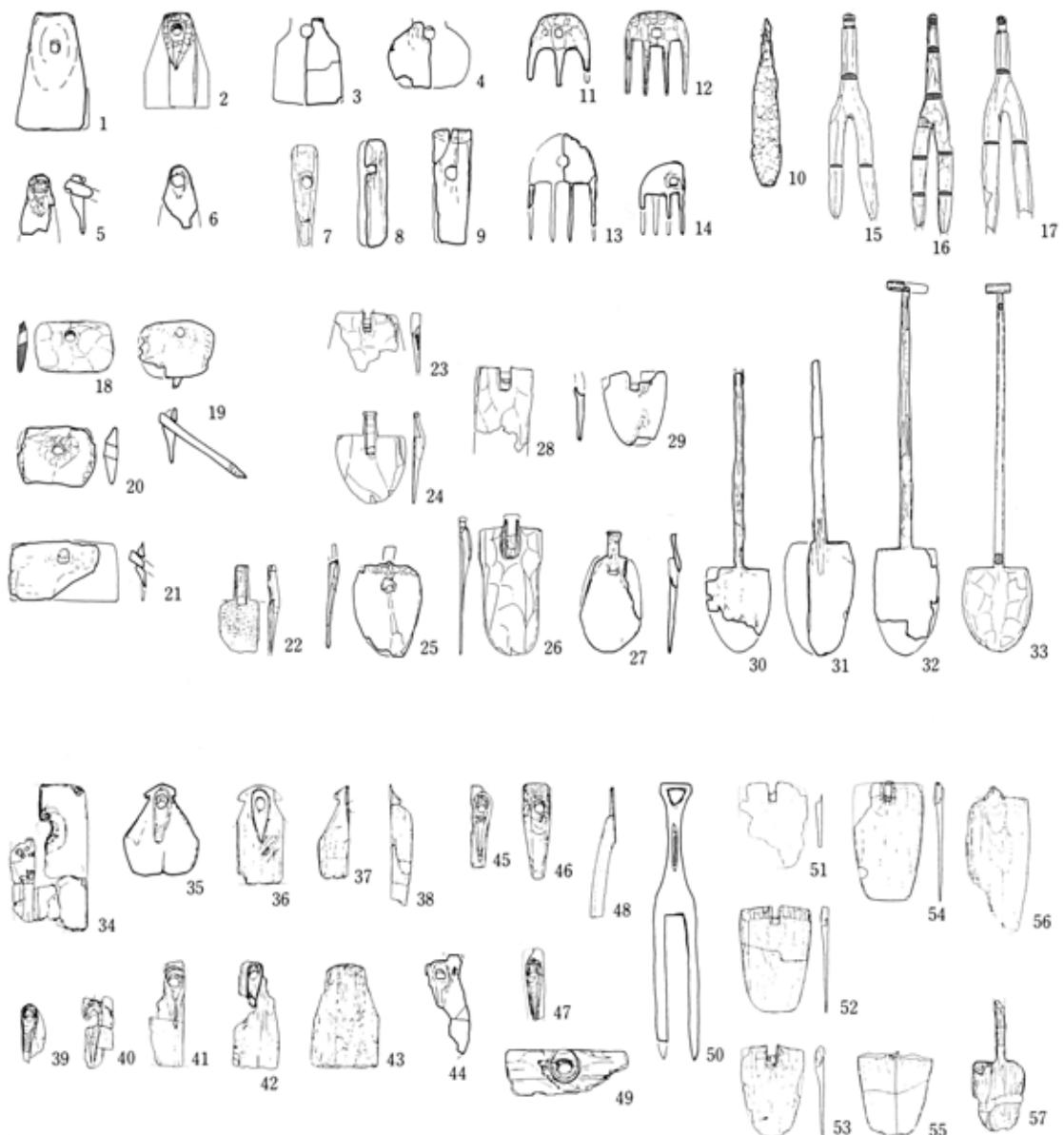
亀井遺跡（34～57） 大阪府八尾市亀井遺跡からは次のような農耕具が出土している（大阪文化財センター1980 b・83・84・86）。広鍬（34～44）には数種類の形態がみられる⁽³⁾。そのなかで、35～37はいずれも頂部両端に笠状の突起をもうける共通した形態である。41も同じタイプになるかもしれない。これらは亀井遺跡に特有の広鍬の形態である。また、43は東海地方の広鍬と共通した形態をとっている。44は柄穴の両側に小孔をうがち、泥除け（第41図115～118）を装着するようになっている。45～47は狭鍬である。いずれもやや下端が細くなる形態で、着柄用の隆起を明確につくりだす例（45・47）とそうでない例（46）がある。48は膝柄股鍬Aである。半分に欠損している。49は横鍬である。瓜生堂遺跡の例とことなり、柄孔の周囲の隆起を明確につくりだしている。50は一本式の股鍬であろう。畿内ではほかにほとんど数例がない、きわめて特異な器種である⁽⁴⁾。51～54は組み合わせ鍬で、55～57は一本鍬である。

池上遺跡（58～68） 大阪府和泉市池上遺跡では次のような器種がみられる（大阪文化財センター1974・78）。広鍬（58～61）はいずれも亀井遺跡の43と共通する形態である。東海地方の例ほど着柄用の隆起を明確につくりださない点を特徴とする。62・63は膝柄股鍬Aである。63は軸部に明確な段をもつ。64～67は一本鍬である。66の把手は逆三角形を呈する。68は掘棒である。膝柄鍬Aに直柄を装着した形態に似る。出土例は少ない。

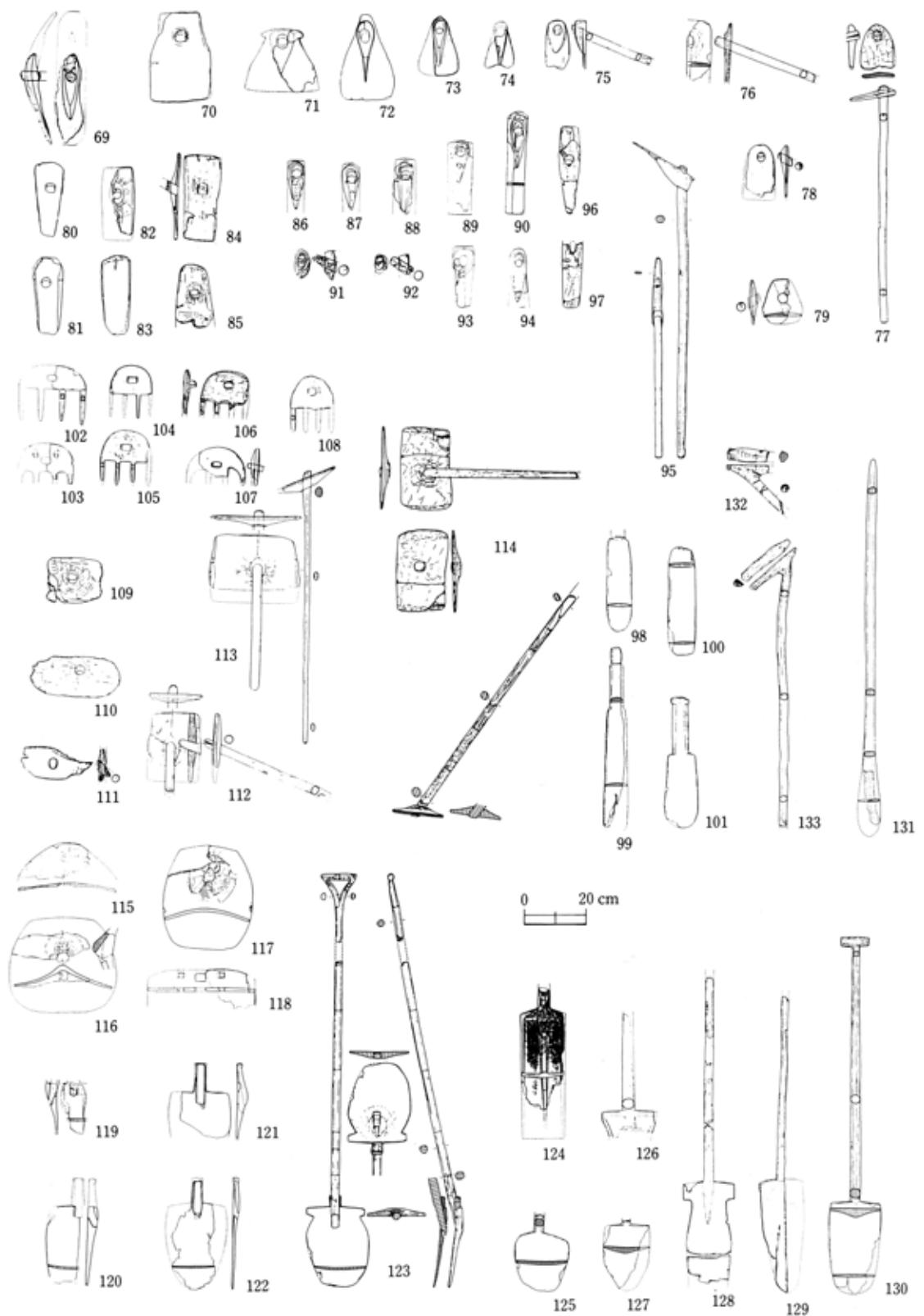
池上遺跡

鬼虎川遺跡（69～132） 大阪府東大阪市鬼虎川遺跡の農耕具をみてみる（東大阪市文化財協会1987 a・b・88）。これらの資料は時期的に第II様式をふくむため、諸手鍬（69）のような前期的な器種も残るが、それを除けばおおむね中期の器種組成をしめしているとみてよい。70～79は広鍬である⁽⁵⁾。広鍬にはいくつかの形態がみられるが、そのうち、72～75と77・78の2タイプがこの遺跡に特有の形態である。71は亀井遺跡の広鍬（35～37）に似る。79は形態が東海地方の小型鍬に似ているが、法量はこちらのほうがかなり大きい。80～97は狭鍬である。その形態は、明確な着柄用の隆起を有する例（86～95）とそうでない例（81～85・96・97）に大きくわかる。84・95は着柄の角度が鈍角で、いわゆる踏み鍬となっている。98～101は膝柄鍬Aである。132・133がこれに取りつく膝柄である。台部の前端と後端に紐掛用の突起がある。102～108は又鍬で、いずれも4本歯となっている。102～107は方形で108は円形の柄孔があく。103は柄孔の両側に小孔があり、なんらかの付属具（泥除けか）が取りつく可能性がある。109～114は横鍬である。横長方形のもの（109・112～114）

鬼虎川遺跡



第40図 縦内地方の木製農耕具(1)
(1~33瓜生堂遺跡、34~57竈井遺跡、58~68池上遺跡)



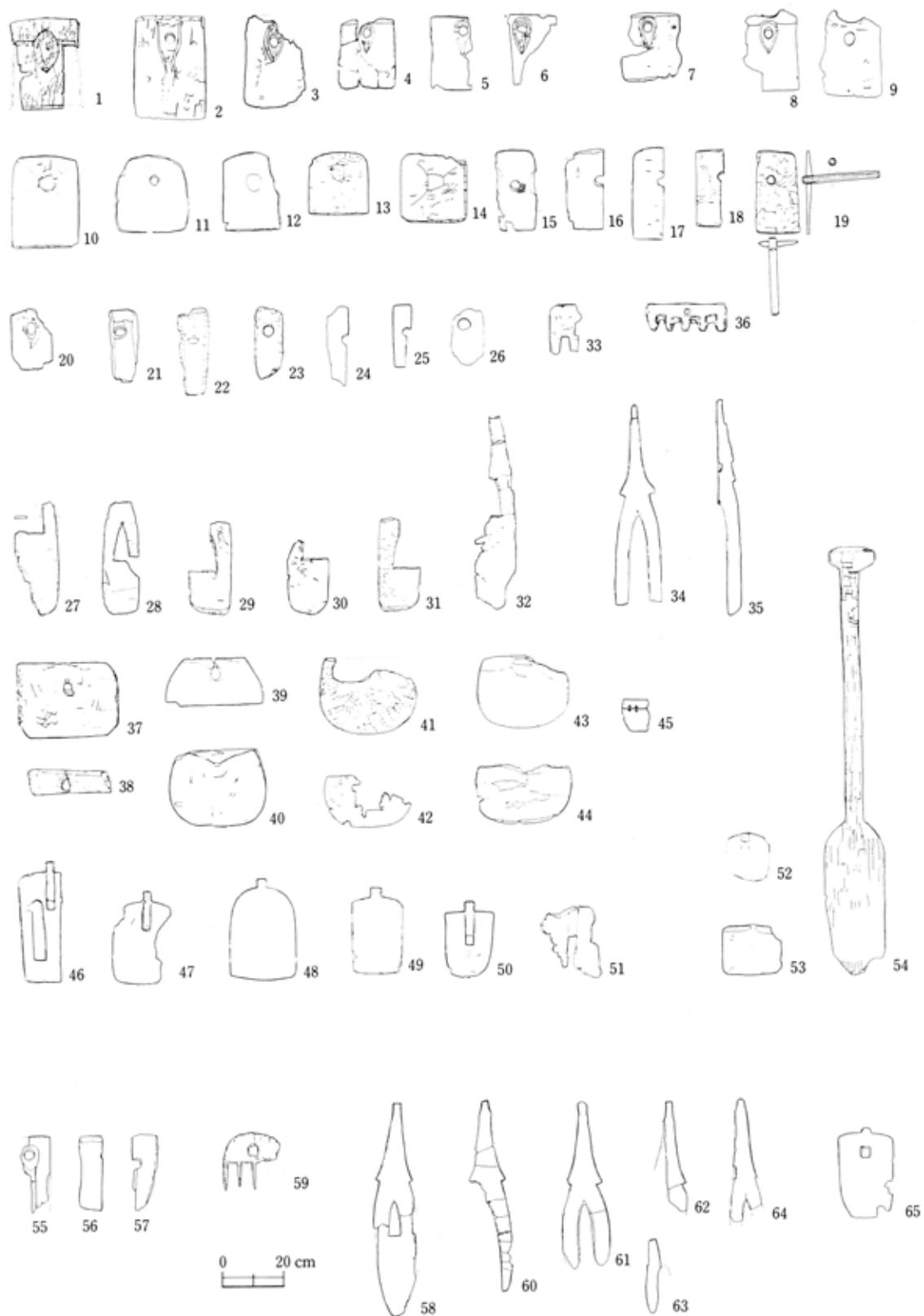
第41図 織内地方の木製農耕具(2)
(69~133鬼虎川遺跡)

と楕円形（110・111）の2タイプがある。115～118は泥除けである（黒崎1988）。平面形態や木取りは横鋤に似ているが、厚み・着柄の角度などの点で大きくことなる。しばしば補修孔をもつ例があるのも特徴である（第42図45など）。おもに広鋤に装着される。118のように、柄孔の両側に紐などで固定するための小孔をもつ例も多い。119～123は組み合わせ鋤である。123は身の上端に、足掛け用に笠状の突起がつく。124～130は一本鋤である。身の縁辺を厚くつくる例（124・126）や、足掛け用の突起を有する例（128）など様々な形態が認められる。131は池上遺跡でもみられた掘棒である。

瓜生堂遺跡 瓜生堂遺跡（1～33） 最後に大阪府東大阪市瓜生堂遺跡をみる（瓜生堂遺跡調査会1971・72・73・82、大阪文化財センター1980a）。広鋤（1～6）にはいくつかの形態が認められるが、亀井・池上・鬼虎川遺跡のように、その遺跡に固有の形態といえるものはみられない。このうち2は東海・畿内の広い範囲で出土している広鋤の形態に近い。狭鋤（7～9）はおおむね縦長方形のタイプである。膝柄鋤（10）はA類で、軸部と肩部の境を明瞭につけない。又鋤（11～14）は3本歯（11）・4本歯（12・13）・6本歯（14）があり、柄孔は円形（11・13）と方形（12・14）の両者がある。膝柄股鋤（15～17）も膝柄鋤同様A類で、上端部に膝柄緊縛用の突起をもうける。18～21は横鋤である。鋤には組み合わせ鋤（22・27）と一本鋤（30・33）がある。32・33はT字形の把手をつける。

畿内の器種組成 碁内の農耕具の器種組成 広鋤にはその遺跡特有の形態のものと広範囲に分布する形態のもの2タイプがあることがあきらかとなった。そのなかで、瓜生堂遺跡だけには固有の形態といえる広鋤がみられない。狭鋤のなかには鈍角に着柄する例もわずかながらある。膝柄鋤A・膝柄股鋤Aもまた広く普及している器種である。又鋤は方形の柄孔をもつ例と円形の柄孔をもつ例が混在している。歯の本数は4本が主流である。横鋤も出土例が多い。平面形態は方形のものと楕円形のものがみられる。泥除けは瓜生堂・亀井・池上遺跡のこの時期の資料のなかにはなかったが、弥生時代前期からある器種であり、中期においても一般的に存在するとみてもさしつかえなかろう。鋤には組み合わせ鋤と一本鋤の両方がある。掘棒や一本の股鋤は数量的にごくわずかであり、小論の目的である一般的な器種組成には加えない。

山陰 5. 山陰（第42図）
西川津遺跡 西川津遺跡（1～54） まず、島根県松江市西川津遺跡からみていく（島根県教委1988）。広鋤（1～19）はいずれも横幅が広く、平面形態はほぼ正方形かわずかに縦長である。そして、その形態は大きく2つのタイプにわかれる。ひとつは、明確な着柄用の隆起をつくりだし、隆起のつく反対側の面の上端に泥除けを固定するためのゲタとよばれる突起をもつ（1～9）。もう一方は上端部を丸く整え、明瞭な着柄のための隆起はもたない（10～19）。前者は、さらに柄孔の両側に小孔をうがつ例（7）や、上端部を半円形にえぐる例（8・9）など細かくわかる。狭鋤（20～26）も着柄の隆起をつくりだすタイプ（20）と、隆起をもたないタイプ（21～26）にわけられる。膝柄鋤（27～32）は軸部の遺存例がないため、全体の形はよくわからないが、後に述べる日久美遺跡の例（58）からみて、軸部がナ



第42図 山陰地方の木製農耕具
(1~54西川津遺跡、55~65目久美遺跡)

スピ形となるB類が存在するようである。だが、32は肩部の幅の細さからすればナスピ形にはならない。この地域の膝柄鍬できわめて特徴的なのは身の中央に三角形（27は四角形）のスカシがはいる点である。33は又鍬の破片である。34・35は膝柄股鍬で、いずれも軸部にナスピのヘタ状の笠部をもつB類である。軸部の上端に段がついて、先端が突起状に細くなる。すべて二股である。⁽⁶⁾36はエブリである。5本の短い歯をつくりだし、身の中央に円形の柄孔をあける。37～45は泥除けである。⁽⁷⁾平面形態が横長の方形のもの（37・38）と、橢円形に近いもの（39～45）の2タイプにわかれる。いずれもゲタのつくタイプの広鍬と組み合わせて使用したと考えられている。45は破損部分に4か所孔をあけ、紐でくくりつけた跡がみられる。46～51は組み合わせ鍬である。46には縦長方形のスカシがはいる。52～54は一本鍬である。

目久美遺跡 **目久美遺跡（55～65）** 次に鳥取県米子市目久美遺跡をみる（米子市教委1986）。55～57は狭鍬である。55は着柄用の隆起を有し、56・57はこれをもたない。58は膝柄鍬Bで、西川津遺跡同様、三角形のスカシがはいる。59は5本歯の又鍬で、方形の柄孔をもつ。60～64は膝柄股鍬Bで、軸部の上端には西川津遺跡の例ほど明瞭ではないが、やはり段がつく。65は組み合わせ鍬である。

山陰の器種組成 **山陰の農耕具の器種組成** まずは広鍬である。いずれも平面形態がやや正方形に近い印象を与える。大きく2つの形態があり、一方は泥除けの固定のためにゲタを有する点が特徴的である。また、上端部を半円形にえぐるなど、機能とは直接かかわりのない装飾的な要素も認められる。狭鍬にも広鍬同様、2タイプがある。膝柄鍬にはA類とB類の両方がある。身の中央に三角形のスカシをもつ。又鍬には方形の柄孔を有する例がある。膝柄股鍬はいずれも二股で、B類に属する。5本歯のエブリも認められる。泥除けには横長方形と橢円形の2タイプがある。鍬には組み合わせ鍬と一本鍬の両方がある。

山口県 **6. 山口県（第43図）**

宮ヶ久保遺跡 **宮ヶ久保遺跡（1～17）** 山口県阿武郡阿東町宮ヶ久保遺跡の農耕具をみてみる（山口県教委1977）。この遺跡の広鍬（1～5）には正方形に近い平面形態やゲタをもつ点など、形態のうえで山陰との結びつきが顕著に認められる。6は狭鍬である。7～12は膝柄鍬、13～17は膝柄股鍬で、その形態は畿内の例とほとんどかわらない。18・19は組み合わせ鍬で、19は広鍬同様、山陰の例に類似する。20は鍬の柄で、21は掘棒、23は鍬の膝柄である。

北部九州 **7. 北部九州（第44・45図）**

那珂久平遺跡 **那珂久平遺跡（1～57）** まずは福岡県福岡市那珂久平遺跡である（福岡市教委1987）。1～4は広鍬である。1は縦長方形で上端部近くに半円形を呈する着柄用の隆起をもち、円形の柄孔をあける。2～4は上端部から下端部にかけてゆるやかに幅がひろがり、着柄用の隆起を全くもたない形態の広鍬で、方形の柄孔があく。山口譲治氏によると、北部九州で出土する弥生時代中期後半以降の広鍬の95%以上はこの形であるとのことで（山口1988）、1は弥生時代中期前半までの古い形態の遺存とみることができよう。5～8の狭鍬も、広鍬と同じく着柄のための隆起をもたず、方形の柄孔を有する。9～11は広鍬の付属具一式

で、11は柄で9は泥除け、10は柄に広鋤・泥除けなどを固定し、鋤の着柄角度を変化させることができる、くさびのようなものである。12～16は二股鋤で、東海・畿内・山陰の例と大きくことなり、膝柄鋤の形をとらずに方形の柄孔をもち、鋤としての機能のみを有する。17～45は三股鋤で、柄の装着方法は二股鋤と同様である。その出土量は遺跡を問わず、二股鋤にくらべて、というより他の農耕具とくらべても圧倒的に多い。四股鋤（46）や七股鋤（47）も一例ずつながらみられる。48・49はエブリで、短いギザギザの歯がつく。48は広鋤からの転用で珍しい。50～57は一本の鋤である。54～56には身の上端に足掛け用の突起がつく。

田村遺跡（58～77） 福岡県福岡市田村遺跡の農耕具である（福岡市教委1984）。58は下端部にまで達するしっかりとした着柄用の隆起をつくりだした広鋤である。その形態は畿内の広鋤（第3図72など）に酷似しており、北部九州で通有の広鋤とはかなりことなることから、その系譜が注目される。59～72は三股鋤である。73は四股の一本鋤である。これもまた、他の地域にはみられない北部九州特有の器種である。鋤と同じく三股の例が多いようである。74～77は一本鋤である。

田村遺跡

鹿部東町遺跡（78～80） 福岡県柏原郡古河町鹿部東町遺跡である（九州大学1973）。弥生時代中期前半に属する資料であるため、未だ諸手鋤（79）が残る。78はこの地域では稀な着柄の隆起をもつ狭鋤である。80もまた、北部九州では非常に珍しい膝柄鋤Aである。軸部全体に緊縛痕が残る。

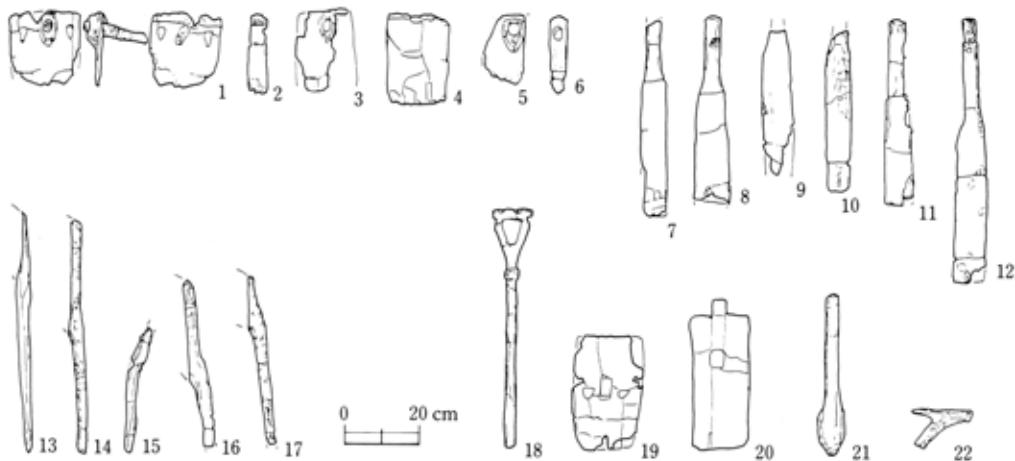
鹿部東町 遺跡

板付遺跡（81～83） 福岡県福岡市板付遺跡の資料である（福岡市教委1977）。81は畿内では通有の膝柄股鋤Aで、北部九州ではきわめて稀な出土例である。82は一本の三股鋤で、柄は欠損している。83は一本鋤である。

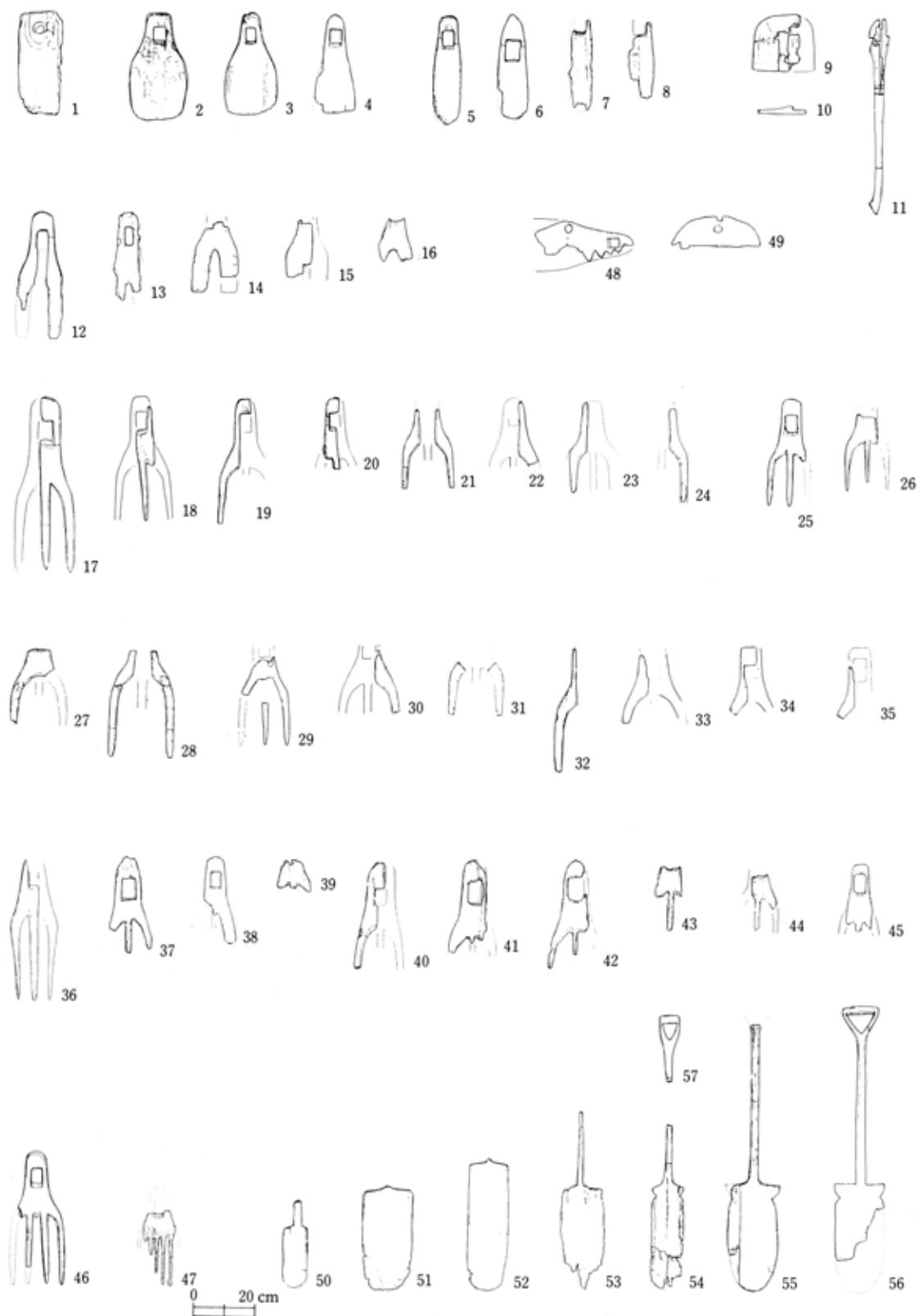
板付遺跡

北部九州の農耕具の器種組成 まず広鋤は2～4が一般的な形態である。狭鋤も同じく5～8を基本とする。これらの鋤には9のような泥除けが装着される。股鋤は三股が一般的であり、二股や四股以上は少数例である。股鋤は方形の柄孔をもち、鋤としてのみ使用され

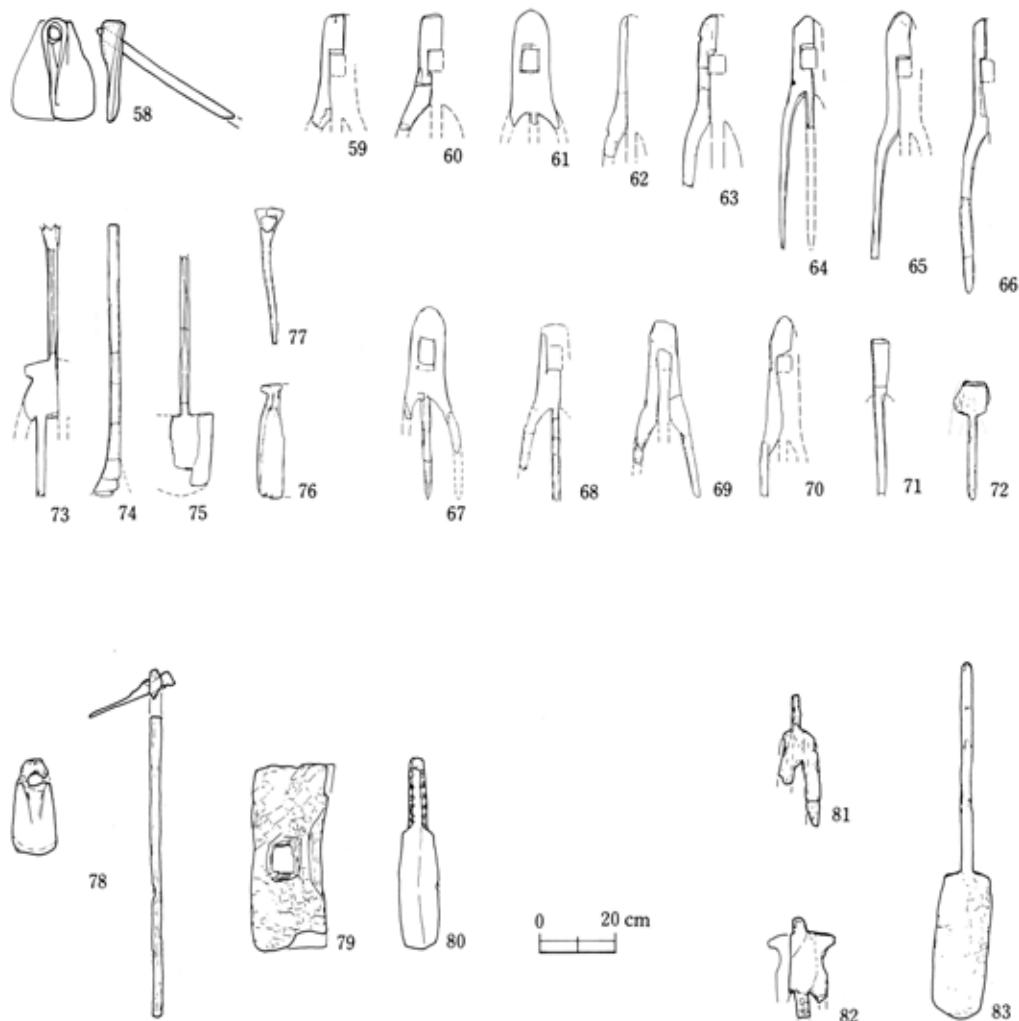
北部九州 の器種組 成



第43図 山口県阿武郡阿東町宮ヶ久保遺跡の木製農耕具



第44図 北部九州地方の木製農耕具(1)
(1~57那珂久平遺跡)



第45図 北部九州地方の木製農耕具(2)
(58~77田村遺跡、78~80鹿部東町遺跡、81~83板付遺跡)

る。鋤としては別に一本の股鋤があり、股鋤と股鋤はその形態のうえではっきりと区別される。膝柄鋤・膝柄股鋤はごく少数の例外を除けばほとんど存在しない。又鋤は弥生時代中期前半で消滅し、この時期までは残らない（山口1989）。エブリには短いギザギザの歯がつく。鋤は一本鋤がほとんどであるが、組み合わせ鋤も少数ながら存在するようである。

8. 器種組成の比較検討

ここでは、今まで復元してきた4つの地域での基本的な農耕具の器種組成と形態を相互に比較して、各地域の特徴を記述していくこととする（第46・47図）。

東海 東海は畿内と器種組成・形態の双方の点で非常によく近似していることがわかる。特に筆者の分類による広鋤のA類や膝柄鋤・膝柄股鋤にはきわめて強い共通性がうかがえる（樋上1989）。それ以外の器種にも同様のことがいえるが、東海では泥除けが欠落し⁽⁸⁾その一方で畿内にはない小型鋤の存在が目につく。すなわち、東海の農耕具は一部に独自の地域色をもちつつ、全体としては畿内のきわめて強い影響のもとに成立しているとみてよ

かろう。

- 畿内** 広鋤には遺跡（集落）ごとの固有の形態と集落の域をこえて広い範囲に分布する形態（広鋤A）の両方が認められる。そのなかで、瓜生堂遺跡には集落固有といえる広鋤がみられない。従来、瓜生堂遺跡からは未製品段階の農耕具が出土しないことから、他の集落から農耕具を供給されていたものと理解されている（田代1987）。広鋤の形態にバラツキがあるのはそのためかもしれない。
- 山陰** 山陰の農耕具は形態のうえで他の3地域とことなる。広鋤は正方形に近い平面形態で着柄の隆起の反対側の面にゲタとよばれる突起をもつ。膝柄鋤・膝柄股鋤の軸部の形態には他地域にさきがけてナスピ形を採用している。これらは、ナスピ形農耕具の起源を考えるうえで注目すべき資料である。また、膝柄鋤の身の中央部に三角形のスカシがあく点も特徴的である。山陰・北部九州には東海・畿内にみられた横鋤がない。しかし、それのかわる器種としてエブリの存在をあげることができる。おそらく両者は機能面では同じものと考えてよい。
- 山口県** 宮ヶ久保遺跡の農耕具は、広鋤・組み合わせ鋤には山陰との結びつきが、膝柄（股）鋤には畿内との結びつきが認められる。これは、山陰・畿内それぞれの農耕具の地域色がおよぶ範囲の接点にこの遺跡が位置していることをしめしている。一方、この遺跡から出土する土器は北部九州系のものが大半を占める。このことは、土器と農耕具の分布のあり方の違いをしめしており、興味深い。
- 北部九州** 北部九州の農耕具のもつ特徴は、シンプルな形態、機能による器種分化の発達、集落をこえた形態の齊一性、の3点に集約される。広鋤・狭鋤・股鋤には着柄の隆起機能とかかわりのない装飾の類はほとんどみられない。機能による器種の分化の点では他の3地域での主要機種である膝柄鋤・膝柄股鋤の欠如がその理由としてあげられる。鋤・鋤両方の機能をもつこれらの器種は北部九州には採用されていない。そして膝柄股鋤のかわりには鋤・鋤それが固有の機能に限定された、柄孔をもつ股鋤・一本の股鋤が発達したのである。あるいは、これは北部九州には膝柄鋤の伝統がなかったためにあらわれた現象ともみることができよう。股鋤・股鋤のなかでは二股のものは少なく、三股の例がそのほとんどをしめ、出土量の点でも他の器種を圧するほど多さをほこっている。また、又鋤がこの時期まで残らないのも他の3地域との大きな違いである。前述のように、北部九州出土の広鋤の約95%以上がほぼ同じ形態をとることは、集落ごとに農耕具の形態の差がきわめて少ない、この地域における農耕具の地域色の特徴であるとみてよい。
- 4地域の
器種組成** 東海・畿内・山陰・北部九州の4地域の農耕具を概観していえることは、個々の器種には地域ごとの形態の違いは認められるが、機能面での基本的な器種組成としては広鋤・狭鋤・膝柄鋤・（膝柄）股鋤（鋤）・又鋤（北部九州にはない）・横鋤（エブリ）・泥除け・組み合わせ鋤・一本鋤となっている。すなわち、弥生時代中期における、木製農耕具のありかたとしては器種組成は地域をこえてほぼ共通しながらも、個々の形態の点でそれぞれの地域色をもっていると結論づけることができよう。

9. まとめ

以上述べてきたことを要約すると、次のようになる。まず、機能という点からのおおまかな器種組成としては4地域ともほぼ共通する。それに膝柄（股）鍬・又鍬の有無や、鍬類の形態の違いという視点をくわえると、東海・畿内・山陰の3地域と北部九州がことなる系譜に属する可能性が高くなる。さらに、広鍬の形態差・膝柄（股）鍬の軸部の形態差・横鍬とエブリの違いなどの点で東海・畿内と山陰の地域差があらわれてくる。一方、エブリを有することで山陰と九州は共通項をもつことになる。東海と畿内は器種組成・形態などの点ではほとんど共通するが、東海は小型鍬という独特的の器種をもつ反面、泥除けの欠如により畿内とのあいだにわずかな違いをみいだすことができる。このような農耕具の地域色の差異のなかで、特に膝柄（股）鍬の有無による北部九州と他の3地域の系譜の違いを重視したい。なぜなら、膝柄（股）鍬こそが弥生時代後期以降の器種組成の変遷をみていくうえで重要な要素となっているからである。⁽⁹⁾

農耕具は地域や遺跡によって、その形態がことなっている。特に広鍬などの鍬類にその傾向が顕著に認められる。すなわち、東海・畿内では広鍬Aが集落をこえて分布しつつ、畿内には集落固有の形態の広鍬をもつ。山陰・北部九州の広鍬にもそれぞれ特有の形態があり、特に北部九州ではかなりの広範囲に強い齊一性をもっている。この鍬類の形態の違いはただ単に機能や各地域の土壤の違いだけでは解釈できない要素をもっている。これら農耕具の形態は土器の形態・紋様・製作技法などと同じく、それぞれの社会の規制あるいは約束事にもとづいて生みだされている可能性が高いように思われる。つまり、農耕具の形態や器種組成の変化は土器などと同じように当時の社会の変化の一側面を映しだしているといえるのである。

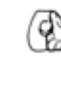
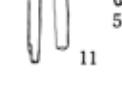
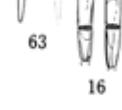
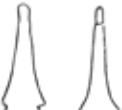
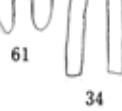
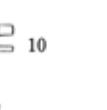
4 地域の 地域差

地域差の 意味

(樋上 畏)

注

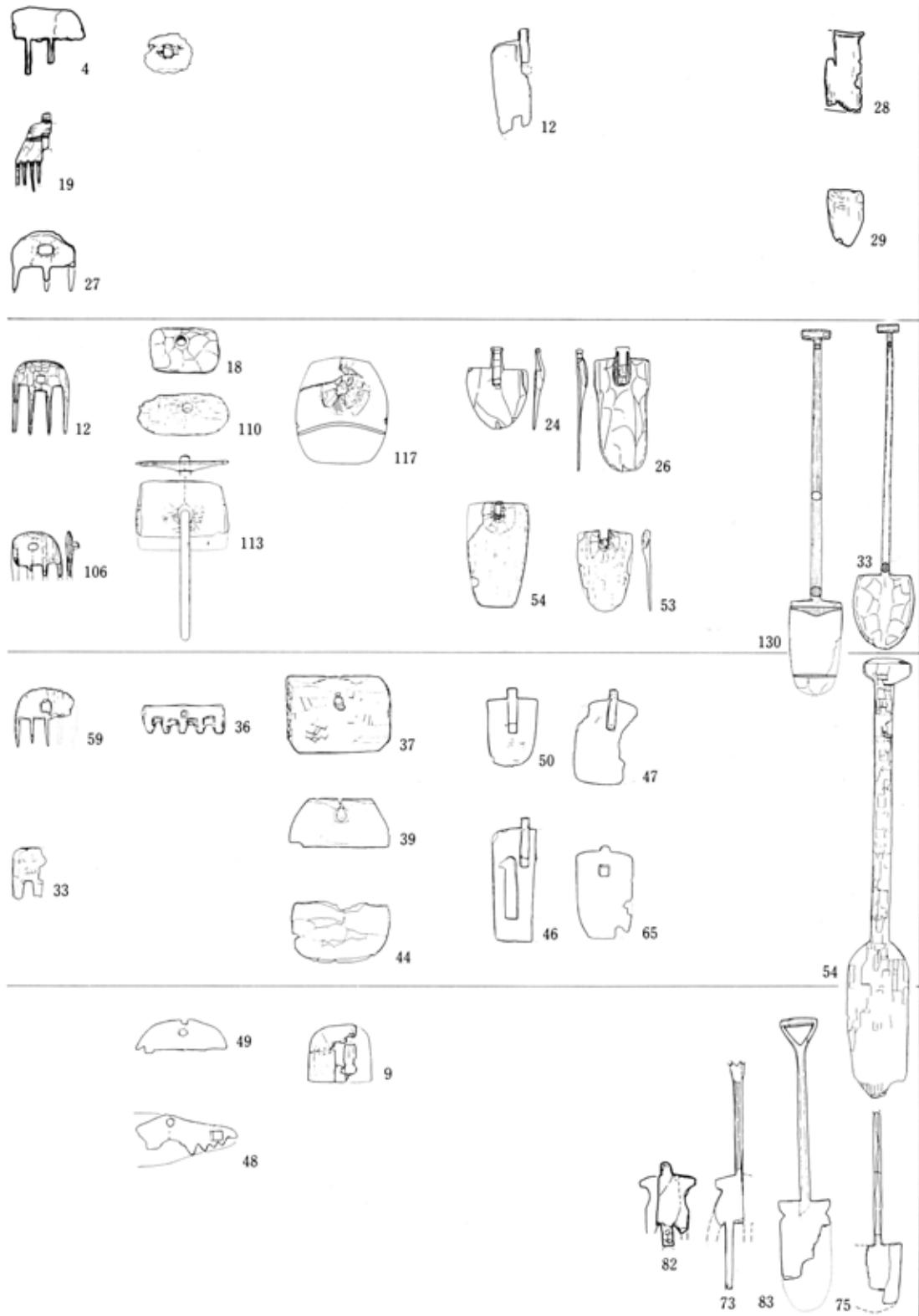
- (1) 小論では柄孔による直柄の着柄・3本以上の細く短い歯をもつ例を又鍬として、軸部による膝柄の着柄・幅広で長い2、3股にわかれた歯をもつ膝柄股鍬と区別している。なお、北部九州の方形の柄孔をもつ股鍬は例は後者にふくめている。
- (2) 膝柄股鍬とA類・B類の名称は町田章氏の分類（町田1980）に従った。
- (3) 38は報告者はナスピ形農耕具の一種とみるが（大阪文化財センター1983）、筆者は広鍬の破片ではないかとみている。
- (4) 弥生時代後期には東海・畿内にも一本の又鍬の出土例がいくつかみられるようになる。
- (5) 報告者の東大阪市教育委員会芋本隆裕氏の分類では広鍬・狭鍬をあわせて平鍬として、下端部の幅が10cmまでをI類、10~20cmをII類、20cm以上をIII類とする。小論では芋本分類のI類を狭鍬とし、II・III類を広鍬としている。
- (6) 弥生時代後期になると膝柄股鍬Bの三股鍬が出現する（島根県教委1988、米子市教委1986）。
- (7) 報告書では丸鍬に分類されている（島根県教委1988）。
- (8) 三重県津市納所遺跡では泥除けが出土しているがそれ以外の遺跡での出土例はない（三重県教委1980）。
弥生時代後期になると東海地方東部での出土例がいくつかみられる。
- (9) このことについてはいずれあらためて論じたいと考えている。

	廣 鍬	狹鍬	小型鍬	膝柄鍬	股鍬	膝柄股鍬	
東 海							
							
畿 内							
							
山 陰							
							
北 部 九 州							
							

第46図 各地域の器種組成(1)

又鋤 横鋤(エブリ) 泥除け

組み合わせ鋤 一木股鋤 一木鋤



第47図 各地域の器種組成(2) (番号は第39図～第45図に対応)

引用文献

愛知県教育委員会

1982 「朝日遺跡」

財愛知県教育サービスセンター

1984 「勝川」 愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告書第1集

財愛知県埋蔵文化財センター

1987 「朝日遺跡」 「年報 昭和61年度」

1988 「勝川遺跡」 「年報 昭和62年度」

瓜生堂遺跡調査会

1971 「瓜生堂遺跡」

1972 「瓜生堂遺跡（資料編）」

1973 「瓜生堂遺跡II」

1982 「瓜生堂遺跡III」

財大阪文化財センター

1974 「池上遺跡 木器編」 第1分冊

1978 「池上遺跡 木器編」 第2分冊

1980 a 「瓜生堂」

1980 b 「亀井・城山」

1983 「亀井」

1984 「亀井遺跡II」

1986 「亀井（その2）」

黒崎 直 1988 「西日本における弥生時代農具の変遷と展開」 日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム 「日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－」

木村有作 1988 a 「木製農耕具について」 『考古学と技術』 同志社大学考古学シリーズIV

1988 b 「東海地方出土の弥生時代木製品について」 『月刊考古学ジャーナル』 6月号 ニューサイエンス社

九州大学 1973 「鹿部山遺跡」

小坂井町教育委員会

1960 「篠東 第1次調査報告書」

1961 「篠東 第2次調査報告書」

財静岡県埋蔵文化財調査研究所

1983 「有東遺跡I」

島根県教育委員会

1988 「西川津遺跡発掘調査報告書IV（海崎地区2）」

田代克己 1987 「石器・木器をつくるむら、つくらないむら」 佐原眞・金関恕編「弥生文化の研究 7」
弥生集落 雄山閣

知立市教育委員会

1989 「西中神明社南遺跡」 「西中遺跡群VI」

豊橋市教育委員会

1963 「瓜郷」

内藤晃・市原寿文

1968 「小笠郡菊川町白岩遺跡発掘調査概報」 「東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書」

浜松市遺跡調査会

1983 「国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第IV次発掘調査概要」

關東大阪市文化財協会

1987 a 「鬼虎川の木質遺物－第7次発掘調査報告書 第4冊－」

1987 b 「鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告」

1988 「鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告」

樋上 昇 1989 「木製農耕具の地域色とその変遷」 「年報 昭和63年度」 財愛知県埋蔵文化財センター

—

福岡市教育委員会

1977 「板付周辺遺跡調査報告書（4）」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第138集

1984 「田村遺跡II」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集

- 1987 「那珂久平遺跡II」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第163集
- 町田 章 1980 「SD6030出土の木製品の検討」 『平城宮発掘調査報告X』 奈良国立文化財研究所学報
第39冊
- 三重県教育委員会
1980 『納所遺跡－遺構と遺物－』
- 山口県教育委員会
1977 『宮ヶ久保遺跡』
- 山口讓治 1988 「福岡における弥生木製農具」 『月刊考古学ジャーナル』 6月号 ニューサイエンス社
- 1989 「出土木器について」 『板付周辺遺跡調査報告書(15)』 福岡市埋蔵文化財調査報告書
第210集
- 米子市教育委員会
1986 『目久美遺跡』